Collection
de la
Littérature Universelle

# シエリ　シエリの最後
# 招　か　れ　た　女

コレット　ボーヴォワール

岡田眞吉　川口篤　笹森猛正譯

世界
文學
全集

22

河出書房

世界文学全集（第二期）22

コレット　シェリ他
ボーヴォワール　招かれた女

特抄本文紙：神崎製紙株式会社
同納入：中井商店
表紙クロース：日本クロス工業株式会社
同納入：小島洋紙店

昭和三十年十二月十五日印刷
昭和三十年十二月二十日発行

定価　三百八拾五円
地方定価　三百九拾円

訳者　岡田真吉
川口篤
笹森猛
正

東京都千代田区神田小川町三ノ八
発行者　河出孝雄

東京都新宿区市ケ谷台町一
印刷者　草刈親雄

東京都千代田区神田小川町三ノ八
発行所　株式会社　河出書房
電話東京(29)三七二一—五番
振替口座東京一〇八〇二

印刷・製本：中央製本印刷株式会社　落丁本・乱丁本はお取替え致します

# 目次

解説……一
コレット
シェリ……九
シェリの最後……八一
ボーヴォワール
招かれた女
第一部……一四七
第二部……二七一
年譜……三八四

# 解説

## コレット

コレットは、多くの人々によって大コレットと呼ばれるほどの大作家であるが、現在のフランス文学史上に占める地位は決して大きいとは言えない。小説、戯曲、随筆、ルポルタージュ、回想録など、その作品は多種多様、ざっと六十巻に達し、独自の風格を持っている。おそらく彼女の真価は将来ますます世界に認められることになるのだろうと思う。

コレットは、一八七三年一月二十八日、フランス中部のピュイゼイ（現在のイヨンヌ県）地方の一小都市サン・ソオヴールに生れている。父親のジュール・ジョセフ・コレットは、アルジェリア歩兵連隊の大尉だったが、マックマホン軍に従って対イタリイ戦役に際し負傷し、左足を失って除隊、サン・ソオヴールの収税吏となった。彼は、引退後もなかなかの活動家で、地理学協会の会員となり、いろいろの本を読んだり、時には筆をとって多くのパンフレットを書いたりした。母親は、夫のジュール・ロビノオ・デュクロと死別して後、夫の持っていた広いサン・ソオヴールの農地にひきこもっていた若い未亡人アデール・ウージェニイ・シドニイ・ランドアである。彼女は、パリに生れたが、早くから両親を失い、ベルギイでジャアナリストとなっていた二人の兄にひきとられて、かなり自由な少女時代をおくった。ロビノオはこの若い元気のよい妻の心を得ることができずに、二人の幼児を残して死んだが、その死後一年にして、彼女はジュール・コレットと再婚したのである。この母親は、コレットの小説の中に、シドという名で常に深い愛情を以て語られているが、この母の影響が、大きく作家としてのコレットに作用していることは疑うことができない。即ち母親の関心の大きな部分は、子供たちの面倒をよく見る他に、常に農地における植物と家畜に対する深い心使いに向けられていた。幼いコレットはいつもこの愛情深い母親の身辺にまつわりつきながら、母親から、自然を愛する心と、動植物を観察する眼とを養わされたのであった。その上、母親は、土地の司祭と親しく交わりながらも、盲目的に宗教を信じない合理主義者の面を持ち、理性深く行動することを教えた。コレットの客観的なものの考え方はその影響であろう。またコレットは一生自分の生れ故郷に変ることのない郷愁を抱いていたが、これも幼年時代、母親に教えられた土への愛情が実ったのであろう。コレットに比較される女流作家ジョルジュ・サンドの作品を香りの高く、生々としたものとしているあのすばらしい自然への感情を、我々は、コレットの作品の中にも、尚一層力強く、一層身に迫るものとして見出すことができる。

しかしこの田園生活も終りをつげることになった。一八九三年、コレットが二十歳の時、ゴオティエ・ヴィラアルが、彼女を妻としてパリに連れ出したのである。ヴィラアルはその時すでに三十四歳になっていた。象徴派の詩人たちにとってはモオジ、地口の愛好家にとってはウィリイ、音楽ファンにとってはゴオティエ・ヴィラアルと三つもの名前を持っていたこの生粋のパリっ子ウィリイと、少女時代に父に連れられてパリに来ても、すぐ故郷の田園に帰えりたがったと言われる野性的なところの多い女性コ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

レットとの結婚は、はじめからうまく行かなかったらしい。ウィリイはコレットの性格の奥底にある荒々しさに磨きをかけて、彼女を社交界において自分に最も役に立つ協力者に仕立てあげたいと思ったが、忽ちに自分の過失に気がつくことになった。しかしウィリイは、コレットの女学生時代の想い出話を聞くうちに、それを書いたらと思って大いにすすめた結果、一八九六年の一月から、コレットは自分の想い出を書きはじめた。それこそ一九〇〇年、ウィリイの名で発表されたコレットの処女作『学校のクロオディヌ』である。

その後ひき続いて、ウィリイの名の下に、いわゆるクロオディヌ物と言われる『パリのクロオディヌ』（一九〇一年）『家庭のクロオディヌ』（一九〇二年）『去り行くクロオディヌ』（一九〇三年）の三冊が発表された。しかし今日では、これらの小説はすべてコレットの筆になるものとされている。ただどのくらいウィリイが筆を加えているかは問題である。その点について、コレット自身が、ヌウヴェル・リテレエル紙の編集長に、いくつかの大学ノオトを見せて、ウィリイの華奢な筆で、コレットの原文にところどころ加筆してある跡を示した事実から見ると、ウィリイの協力はある程度本当のことであろう。しかし、その大体がコレットの筆になることは疑いはなく、殊に第三作あたりからは、ウィリイの加筆は殆どないものと考えるのが至当であろうとされている。当時、社交界のゴシップや音楽批評などで、ジャアナリストとしてすでに知名であったウィリイが、自分の名をこれらの本につけた方がよく売れるだろうという心使いから、ウィリイ著としたのであろうと思う。このクロオディヌ物は、コレットの一種の自伝小説視され、クロオディヌはコレットを、『パリのクロオディヌ』以後の中老の紳士ルノオはウィリイをモデルにしたものであるとされている。しかしクロオディヌがコレットの自画像であることは間違いないが、ルノオの方は、一応ウィリイを頭において書いていることは確かであるが、なにからなにまでウィリイをモデルとしたとは断言できないとするのが正しいようである。この四つのクロオディヌ物の中で一番注目すべき作品は、『家庭のクロオディヌ』であろう。ルノオと結婚したクロオディヌは、次第に夫との間の性格の相違に気がつき、最後に女友達レジイが夫と通じて自分を裏切ったのを知ると、自分だけの孤独の生活にとじこもるようになるという物語だが、ここでは後年、コレットの才能が最も豊かな開花を見せた男性対女性の肉体的な愛情のニュアンスある屈折の描写が、すでに窺われて、彼女の作家としての第一歩がここにきずかれだしたような気がする。尤もこの四冊のクロオディヌ物は、コレット文学の中で考えれば、単なる出発点を示すだけで、あまり重要な作品と言うことはできない。

この四冊のクロオディヌ物の後、『ミンヌ』『ミンヌの迷い』の二つの中篇小説が、再びウィリイの名の下に発表されているが、後にこの二冊を『放逸なおぼこ娘』（一九〇九年）と題した一つの長篇小説にまとめて、今度はコレットの名で発表されている。コレットは、その序文の中で、『ミンヌ』は自分の名で発表したいために短篇として書いたものだが、好評の結果、続篇『ミンヌの迷い』を書くことになったので、この二つをまとめて一つの長篇とした方がよいと思ったのだと書いている。

一九〇六年、コレットは遂に、クロオディヌ物が暗示したように、ウィリイと離婚した。しかしこの離婚は、どうやらウィリイの方が積極的だったらしく、コレットの死後発行されたウィリイの友人シルヴェイン・ボンマリアージュの『ウィリイ、コレット、そして私』という本によると、離婚後も、コレットは、シルヴェ

インに元の鞘に戻れるよう泣いて尽力を頼んだと言っている。この離婚の時、コレットは、自分の名で発表した作品は、『動物との対話』（一九〇四年）ただ一冊で、まだ文学者として立つだけの力はなく、その後六年間も、女優として舞台に立っていたことから見ると、或いは真実の話かも知れない。この間の生活は、クロオディヌの変身であると言われるルネ・ネレを女主人公とする『さすらいの女』（一九一〇年）及び『足かせ』（一九一三年）と『ミュジック・ホオルの内幕』（一九一三年）などの作品の中に詳細に描かれている。

一九一三年、コレットは、外交官アンリイ・ド・ジウヴネルと結婚して舞台生活を止め、この頃から、ル・マタン紙に、毎号コントや劇評を書きだして、次第に文名が高くなった。そして第一次大戦が起ると、出征した夫の後を追って、従軍記者となった。ジャアナリストとしての彼女の存在を示す作品には、『長い時』（一九一七年）『群衆の中に』（一九一八年）『日毎の冒険』（一九二四年）などがある。

しかし小説家としての彼女の名声を決定したのは、やはり『シェリ』（一九二〇年）の発表からであろう。おそらくこの『シェリ』とその続篇として発表された『シェリの最後』（一九二六年）の二つは、コレットの最高の作品と言っても過言ではないだろう。しかもこの小説は、コレットがはじめて書いた本格的な小説で、これまでの作品の主人公は、クロオディヌ物のクロディヌはもちろん、『感傷の隠れ家』のアンニイ、『さすらいの女』のルネ、『放逸なおばこ娘』のミンヌなど、ことごとく、作者コレットの分身で、一種の私小説的な調子を持っていたが、『シェリ』に至ってはじめて非個性的な小説が生まれ、ここにコレットの小説家としての地位が確立されたのである。ではこの二つの小説はどんなことを描いているのか、詳しくは拙訳をお読み下されば分るが、コレットは、この小説の意図について次の如く言っている。

「『シェリ』と『シェリの最後』との中で、私は単に、ある年齢の女が非常に若い男と肉体関係を持つとき、彼女は若い男ほど消えることのないその傷痕をしるしづけられる怖れが少いことを言いたかったのである。男は、どんなことをしても、それに続くあらゆる肉体関係を通じて、年取った情人の想い出をよびおこさないでいられないだろう」

そこにこの二つの小説が、題名の中にシェリという名を持っている理由があるのであるが、この二つの小説を読んだものは、レアを描いたコレットの筆力の方に大きな興味のよせられることは確かである。このことは、コレットが女性を描いて天下一品の才能を持っていることを雄弁に示している。この辺で、コレットの文学的才能について少しばかり論じて見たい。

コレットの才能はまず若くして、自分の家の庭の花々を、森の樹々を、ひっそりと想う動物たちを、「眺め、呼吸し、さわり、耳を傾けた」ことから育て上げられた。こうして養われた綿密な観察力は、やがて彼女の周囲に近づく人々に向けられたのである。そしてそれ以上に自分の心の中に向けられたのである。コレットの描く男性の表現は女性の場合より曖昧だと言われている。それは、男性は、外部的に、身振や言葉から、即ち現象として描かれ、その考え方や情熱の内部はこれを想像して書くより他はない。ところがコレットはものを想像して書くことが不得手である。彼女はものを実際に見、聞いて、それをきびしくしるしづけるのである。

コレットは動物に対して非常に深い親近感を持っていた。その証拠には、彼女がはじめて自分の名で発表した本は、『動物の対

話』というキキイという猫とトビイという犬の対話集であった。それ以後も、『葡萄の巻鬚』『クロオディヌの家』『牝猫』『動物の平和』『猫たち』のように、動植物を対象とするすぐれた小説や随筆が発表されている。実際これまで彼女ほどに草花のこと、動物のこと、植木のことを知っている作家はいなかった。ついでそれらの知識を彼女は、人間の、殊に女たちの性格描写や心理描写に利用した。例えば、「彼は猟犬のような大きな溜息をついた」とか、「疑い深い犬の注意力をおそろしいと思わせるあのはげしさとねばり強さで彼女を眺めていた」とか、「なんて気持が悪いんだろう。まるでかみつこうとするグレイハウンドの犬のようだ」などという比喩の言葉が彼女の作品には到るところに発見される。それと共に、鋭い観察と深い分析によって、今まで人々の知らなかった新しい世界が、詳細にあばきだされ、彼女の作品を読む人々は必ずそこに新しい生命の驚異を発見して、今までの自分は眼も耳も鼻も持っていなかったと気づかないものはないだろう。

この刻明な分析は、その養われた観察力の他に、一つに彼女が生れつきすばらしい感覚を持っていることから生れている。彼女の感覚は、視覚より聴覚、聴覚よりも嗅覚にすぐれている。彼女は、色と音と香を、動物に劣らぬ本能によって識別して、それを的確に表現する。殊に香についての叙述が彼女の作品の中では目立っている。実際、彼女の描写は、理性的と言うよりも寧ろ官能的であり、直観的であり、本能的である。自然のありのままを、鋭く深く分析する。しかもその分析の力が一番見事な花を開かせるのは、女性のいわゆる「肉の魂」の表現であろう。男性に対する女性の宿命に反抗しながらも、やはり肉体的に男性にひかれないわけにはいかない女性の言わば雌の意識ともいうべきものについての、彼女の微妙精緻な表現は、他のいかなる作家にも追従を許さない独特の彼女の才能である。しかも彼女の肉欲の表現は、物理的、具象的なのが特徴である。そこには精神的なものがあまり含まれていない。普通の昆虫や動物の愛情生活を観察しているような客観的な態度さえ見えている。従ってそこには善悪を超越した原始の素朴な肉欲の姿がありのままに投げだされている。一部の批評家の中にはコレットの作品を不道徳として批難する人もあるが、読んだ感じは決してそんなものではない。時にはあるモラルさえ感じられる。フランソア・モオリアックさえ、『シェリ』と『シェリの最後』を批評して、「そこには肉の動き以外のなにものも見ようとせず、また知ろうともしない強い気持が見られる。しかも、我々の品性を低下させ、我々の精神を汚すものはなんにもないと言うだけでは到底言い足りないすぐれたものがある」と言っている。それはコレットの詩のためである。詩人としてのコレットの感覚的なリリシズムが、厳としてその文章の背後に光っているからである。おそらくコレット文学の持つこの巨大なディオニソス的な詩こそ、彼女を大作家として認めさせる最大の長所ではなかろうか。

つぎに彼女の文体についてしるせば、多彩で、しかも厳しいの一語につきよう。特に後年のものにおいては古典的とも言い得るほどの格調がある。しかしその独自な点と言えば、ごく僅かな語句で、ある心理なり、状景なりを鮮やかに浮び上らせると共に、ドラマティカルな表現にすぐれているのが目立っている。生気の溢れる対話によってストオリイを進めて行く技術の見事さ、特に女主人公に対しては、鋭くその分析の目が心の奥底に貫き通って、隠された微妙な感情のニュアンスが生々ととりだされている。まことに翻訳し難い文章で、今日までこの大作家の作品が十分にわ

が国に移植されなかった原因の大部分は、そこにあるのだろうと思う。

『シェリ』『シェリの最後』の二作の他に、コレットの代表作とされるものは、恋愛の諸相は年齢によって変らないことを示そうとしたと自ら言っている新しいダフネとクロエの物語『青い麦』(一九二三年)、コレットの好んで描いた愛情への諦めをテーマとする代表作の一つ『光りの誕生』(一九二八年)、肉欲を描いてコレット独自のものを見せている『快楽』(一九三二年)、三角関係の傑作『牝猫』(一九三三年)、一種の成熟したクロオディヌを描いた『ジュリイ・ド・カルネイラン』(一九四一年)短篇小説家としてのすぐれた才能を示した『ジジ』(一九四五年)などである。第二次大戦後のコレットは、大戦中もずっと閉居していたパレイ・ロワイヤルの自宅――この間の生活をまとめて、回想録『窓からのパリ』(一九四四年)を発表している――にひきこもって、殆ど外出せず、寝たり起きたりの生活ながら、『青色の燈台』(一九四九年)『知られた国にて』『猫たち』(共に一九五〇年)などを書いているが、いずれも戦前の作品には及ばないようである。そして老衰のために眠るが如く、一九五四年八月大往生をとげたのである。葬儀は、サン・ロオシュ寺院に拒まれたために、八月七日、パレイ・ロワイヤルの中庭で厳そかにとり行われ、ペエル・ラシェイズの墓地に葬られた。葬儀当日には一般大衆の参列するものが目立って多く、彼女の大衆の間における盛んな人気を物語って注目されたということである。

終りに劇作家としてのコレットについて一言しておこう。

コレットの劇作については、やはり自作から脚色した『シェリ』(四幕―二一年初演)と『さすらいの女』(四幕―二三年初演)の二つが一番重要なものであろう。共にレポルド・マルシャンが協力している。しかしこの二つの劇は、初演に不満なコレットが、自ら夫々レア及びルネに扮して再演したが、褒貶相半ばするというところで、強いて言えば十分の成功とはいえなかった。また劇における処女作『仲間同志で』(二幕―一九〇九年コレット自身の手により初演)も完全な失敗作だったし、かねてからの望みを達して一九二六年コメディ・フランセエズ座で上演した詩劇『子供と呪い』(モオリス・ラヴェル作曲)も失敗だった。尚コレットには、一九三三年から三六年までの四年間の演劇評論を集めた四巻の『黒い双眼鏡』"La Jumelle Noire"がある。

一九五五年十一月　　岡田真吉

## ボーヴォワール

鬼才ジャン・ポール・サルトルを中心として、「現代」誌に拠る、いわゆる実存主義文学の作家は数多いが、そのなかでも水際立って輝かしい存在を求めるならば、まず第一にシモーヌ・ド・ボーヴォワール Simone de Beauvoir 女史をあげねばなるまい。女史の名は、この翻訳の初版が出てからいろいろな作品が紹介されて、わが国にも知れわたってきたが、サルトルの親しい協力者として、実存主義のすぐれた代弁者として、小説に、評論に、戯曲に、ゆくとして可ならざるなき才能を示し、男まさりの頭脳の冴えと活躍ぶりを見せている、現代フランスの代表的知識人のひとりである。

ボーヴォワール女史は一九〇八年一月パリに生まれた。サルトルよりも三歳年下である。私立学校で中等教育を終えてから、ソルボンヌ大学にはいり、哲学者ラランド、ブランシュヴィグ、心理学者デュマなどについて哲学を専攻し、一九二九年に教授資格試験（アグレジヤン）をパスした。級友にサルトルをはじめ、志半ばにして惜しくも第二次大戦の犠牲となった、革命小説家ポール・ニザンなど、多くの俊才がかぞえられる。サルトルもボーヴォワール女史と同年におなじ試験を通ったが、彼が首席で、女史は次位だったと言う。

その後はマルセーユを振りだしに、ルーアンの高等学校で教鞭をとり、一九三八年パリに帰って、モリエール高等学校の教授になった。第二次大戦がはじまって、パリがドイツ軍に占領され、レジスタンス運動が白熱化した一九四三年、処女作『招かれた女』がガリマール書店から出版されて、一躍大成功をおさめたのをきっかけに、長い間の教師生活に訣別して、文筆に専念することとなった。この年はまたサルトルの根本理念を示す大著『存在と無』ならびに戯曲『蠅』が発表された、実存主義文学運動史上忘れることのできない年である。翌年には小説『他人の血』が同じ書店から出版され、一九四五年、大戦が終って、サルトルが雑誌「現代」"Les Temps modernes" を創刊すると、女史はその片腕となって、実存主義の文学運動に活躍し、続々として秀作を世に送った。

ボーヴォワール女史は大の旅行家で、戦前は学校の休暇を利用して、イタリヤ、ギリシャ、モロッコ、中欧をおとずれ、一九四四年から四七年にかけて、ポルトガル、チュニス、スイス、イタリヤに遊んだ。一九四七年には合衆国に四カ月あまり滞在して、『アメリカその日その日』と題するすぐれたルポルタージュを送ったが、一九四八年、ふたたび新大陸を訪問して、メキシコ、グッテマラに旅行した。この豊富な経験は、『招かれた女』はじめその著作に生かされ、女史の視野をきわめて広いものにしている。

人間の本質の問題を第二にし、人間が世界に厳として存在するという根本事実を基礎として、そこからあたらしい出発を試みた実存主義は、伝統的な見方による世界の秩序を自由の理念によって置きかえた。この自由の問題こそ実存主義モラルの核心であって、いままでの哲学の、究極目的にもとづく決定論的世界観を捨てて、絶対の自由のうちに人間の威厳と行動の根拠をもとめ、自由な意志の選択と一身を挺した行動を提唱するのである。

創造主であり、究極目的である神は存在しない。人間はまず自己の実存を自覚し、その自由な選択によって、刹那刹那に自己を創造し、自己とともに世界を創造してゆかねばならない。そこにはじめて人間の本質、人生の意味を見いだすことができるのであって、人は結局自己の行う選択、すなわち行動の総和にほかならない。この選択は個人に全的責任を負わしめ、あらゆる危険、あらゆるつまずきを覚悟せしめるものである。その唯一の規範は自己の良心であり、自己を裁くものはただ自己あるのみであって、そこにはなんらの許容も、情状酌量も加味してはならない。

『招かれた女』のなかで、ボーヴォワール女史が取組んでいるのは、この全的自由をさがし求める心の血みどろなたたかいである。そこには、他人のうちに生き甲斐を見いだし、幸福の世界にとどまろうとする女ごころと、自己の存在をおびやかす敵としての他者の存在を否定し去ろうとする意志との矛盾に苦しむ、ひとりの誠実な女性が、実存的自由に眼ざめ、空虚な因襲のモラルを捨てて、自者か他者かの自由選択を行い、わざわざ田舎から招いて養った居候娘を殺す、魂の道程が精細に描かれている。

物語は、一九三八年のミュンヘン会談のころから第二次大戦勃発までの、不安と焦躁にみちた時代のパリを背景とする。主人公の女流作家フランソワーズ・ミケルは、いま売りだしの俳優兼舞台監督ピエール・ラブルッスの愛人であり、協力者であって、ピエールとの共同生活を、完全な愛と理解の上に立つ理想的ないとなみと信じて、平穏な幸福に自足している。彼女は、ふとした機会で知り合った、グザヴィエール・パジェスという変った性格の美しい娘に心をひかれて、ルーアンの田舎から自分の手もとに呼びよせて、面倒をみることにする。「招かれた女」グザヴィエールは、一切の努力を嫌い、社会を無視して自己のうちに閉じこもり、無為と刹那の感情の満足に生きようとする異常な性格の持主で、近代フランス小説の創造した女性のタイプのうちでも、異色あるものと言わねばならぬ。ピエールから「黒真珠」というあだ名をもらったこの異常な娘は、邪悪と自堕落と肉欲と嫉妬の悪魔とも見られるし、自由奔放な大自然の野性力のあらわれとも、人間性を否定する残忍なナチスの象徴とも解釈できよう。フランソワーズは、ピエールとの間にはいりこんで、彼女の幸福を破壊しようとするグザヴィエールに、あるいは魅せられ、あるいは憐れみと責任を感じ、あるいは不倶戴天の敵をみとめながら、苦悩のうちに人間の行動の真の限界にめざめて、新しい生活にはいってゆく。この小説は、古い心理分析の手法を捨てて、意識の流れそのもののうちに魂の動きをとらえようとする、現代心理小説の代表作であり、巧みな会話と、淡々とした発端から異常な結末まで息もつかせずに読者をひきずってゆく完璧な話術のうちに、哲学的テーマをみごとに溶かしこんだ、実存主義文学の最高峰のひとつとして、文学史上に不朽の地位を占めるであろう。

『招かれた女』は、不安の雲におおわれた、第二次大戦直前のパリ社会の息苦しい雰囲気を如実に描いた記録としても興味がふかい。また、誠実で、理知的で、女らしい優しさをたたえたうちにも誇の高い主人公フランソワーズは、ボーヴォワール女史自身であろうし、世界の危機に心を痛めながら、繁忙な仕事に従い、その合間には談論風発し、二人の女性にはさまれて、愛憎の二途に悩む、聰明でエネルギッシュなピエール、おしまいの章で、雑嚢を十文字に肩にかけて召集されてゆくピエールの姿には、サルトルの俤が見られぬだろうか？

『招かれた女』のなかで、良心と自由の問題を、個人の面から取りあげたボーヴォワール女史は、さきにあげた『他人の血』（一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

九四四）と『無用な口』（一九四五）で、同じ問題を社会的な面から解剖した。前者は、目的と手段の矛盾になやむレジスタンスの闘士を描いた小説であり、後者は、十四世紀のフランドルの町を背景として、老人や女子供を殺して籠城の町を救わねばならぬ破目におちいった、市民のヂレンマを取扱った戯曲で、四辻座劇場で上演された。つぎに発表した小説『人はすべて死す』（一九四六）では、空間プラス時間の面で、死と戦う個人の問題を検討している。

評論の方面では、実存主義の提起する主要問題を明確に説明した『ピリュスとシネアス』（一九四四）、実存主義のモラルをはじめてはっきり定義した『二重のモラルの弁』（一九四七）がある。この二冊はさきにあげた女史の小説戯曲の注解としてあわせ読まるべきものである。

一面あまりに緻密にすぎる感さえある女史の明晰な頭脳は、繊細な感性を武器とするいわゆる女流作家の地盤をはるかにこえて、冷厳な科学の領域にまでも踏みこんでいる。一九四九年に刊行された『第二の性』二巻は、ロマンチックな面を全然はなれて、女性の自由と能力の問題を、性的、社会的、知的の三方面から精密に検討した厖大なエッセイで、本国でも、外国でも、非常な反響をまきおこしている。

おしまいに、昨年（一九五四）発表された長篇小説『レ・マンダラン』はゴンクール賞を授けられて、ローマン派の巨星スタール夫人に比較される女史の名声に花をそえたことをつけ加えたい。

この翻訳の初版はさきに創元社から刊行された。こんどこの全集におさめることを許して下さった同社の御厚意にお礼申上げるしだいである。

一九五五年十一月　　訳　者

Chéri

# シェリ

コレット

岡田真吉訳

「レア、僕に君の真珠の頸飾をおくれよ、聞いているのかい、レア、君の真珠の頸飾をおくれ」

甲冑のように薄闇の中に輝いている鍛鉄と彫りのある銅からつくられた大きな寝台からはなんの答えもなかった。

「なぜ、僕に、君の頸飾をくれないの、これは君と同じように僕にもよく似合うんだ——君よりもっと似合いさえするんだ」

止め金のカチッと鳴る音がして、寝台のレエスが揺れ動き、手首の華奢な、すばらしい二本の裸の二の腕が、美しいだらんとした両手を高くあげた。

「止めて、シェリ、その頸飾をあまりいじりすぎるわ」

「面白いんだよ……僕がとってしまうんじゃないかと心配しているのかい」

日光を通すバラ色のカアテンを背景として黒黒としたシルエットを描いてシェリは、燃える竈を背にして踊る優しい悪魔のように、踊っていた。しかし寝台の方に退いたときには、絹のピジャマから鹿の皮のスリッパまで、すべてが再び白く見えた。

「心配してはいないわ」と、寝台から優しく低い声が答えた。「しかしそういじりまわすと頸飾の糸が弱ってしまうの、真珠は重いのよ」

「真珠は重いさ」とシェリがもっともらしく言った。「君にこの品をくれた人は、君を馬鹿にするつもりはなかったんだ」

シェリは、二つの窓の間の壁に備えつけられた姿見の前に立っていた。そして自分の大変美しく、大変若々しい姿を見詰めていた。その体は大きくも小さくもなく、髪の毛は黒つぐみの羽根の色のように青味をおびていた。シェリは寝間着をはだけると、盾のように盛りあがった、がっちりと堅い胸をあらわにした。同じバラ色のキラキラする光りが、彼の歯と、陰気な両眼の白目と、頸飾の真珠の上にたわむれていた。

「その頸飾を外して」と女の声がなおも強く言い張った。「わたしの言っていることが聞えるの」

自分の鏡に映る姿の前に身動き一つせず青年はごく低い声で笑った。

「はい、はい、聞いているよ、僕は、これをとられやしないかと君が心配しているのをよく知っているんだ」

「心配なんかしていないわ、しかしもしわたしがそれをあんたに上げたら、喜んでしまってしまうでしょう」

シェリは寝台に走り寄ると、体をまるくして飛びこんだ。

「なんだって、僕は慣習なんか超越しているんだ、僕は、男が、ネクタイピンに真珠を一つや、カフス・ボタンに真珠を二つ、女から貰うと喜びながら、五十も貰えば恥しめられたように思いこむなんて馬鹿の骨頂だと思っているんだ……」

「四十九個よ……」

「四十九個さ、僕だって数えられるよ、じゃ君はそれが僕に似合わないと言うのかい、僕が醜いと言うのかい」

シェリは寝ている女の上に屈みこんで、挑みかかるような笑い声を浴せた。ごく小さい歯並びと唇のぬれた裏とが見えた。レアは寝台の上に腰をおろした。

「いいえ、そんなことは言わないわ、まず第一にあんたがそんなこと信じないから、だからと言って、そんな風に鼻に皺をよせずに笑うことはできないの、あんたは鼻の隅に皺が三本よるようになったらひどく満足なのでしょうね」

シェリはすぐに笑い止めた。額の皮膚を緊張させ、顎の下の方をなまめかしい老婆のように巧みにひっこませた。二人は敬意をこめて眺め合っていた。彼女は、下着とレエスの間に肱をつき、シェリは寝台の端に馬乗りになっていた。シェリは考えていた。(将来できる皺の話を僕にするのはこの女にお似合だ) そして彼女の方も、(なぜ、美そのものとも言えるこの人は笑うと醜いんだろう) と考えていた。彼女は一瞬物思いにふけると、自分の考えをはっきりとぶちまけた。

「あんたは陽気になるとひどく醜くなるから

よ。……あんたの笑いは、意地悪からか、または嘲笑からだけなの、それであんたを醜くするのよ、あんたは時々醜くなるわ」

「そんなこと嘘さ」とシェリが怒って叫んだ。

怒りが、その眉毛を鼻の根元に結びつけ、ぐるっと睫毛をめぐらせて、横柄な輝きに一杯の両眼を大きくさせ、口の高慢で、純潔な弓形を押し開かせた。レアはシェリが自分の好きな姿、ただあとで服従するために反抗し、強く鎖につながれていないのに、自由になることができない姿でいるのを見て微笑んだ、――彼女はいらいらしてその束縛を振りほどこうとした若若しい頭の上に片手をおいた。そして獣をなだめるかのように、囁いた。

「まあ、まあ……どうしたの……一体どうしたの……」

シェリは、女の美しい広い肩の上にのしかかり、額や鼻で押して、寝台に自分のおなじみな場所を凹ませた。すでに両眼はとざされ、長い朝々の安心した眠りを求めていたが、レアはシェリを押し戻した。

「駄目よ、シェリ、あんたはお昼にフランス生れのアルピイ（ギリシャ神話で顔と体が女で、鳥の翼と爪を持った強欲な怪物）のところで御飯を食べるのよ。もう十二時三十分前だわ」

「なんだって、僕がお袋の所で昼食を食べるのかい、君も一緒かい」

レアは、物憂さそうに寝台の奥の方にすべりこんだ。

「わたしは行かないわ、休暇なのよ。わたしは、二時半に珈琲か――六時にお茶か――八時十五分前に煙草をとるつもりだわ……心配しなくてもいいわ。お母さんはいつも十分わたしに会えるわ……それに、わたしは、招かれていないの」

起ったまま、渋面をつくっていたシェリの顔が、いたずら気で輝いた。

「僕は知っている、なぜだか知っているよ、社交界の人間たちが集まるんだろう。美しいマリイ・ロオルとその不良の娘が来るんだろう」

あちこちを見廻わしていたレアの大きな青い眼が一点を見つめた。

「本当に、あの娘は美しいわ。お母さんほどではないが、やっぱり魅力があるわ。……じゃ、きっとその頸飾をはずしてね」

「残念だ」とシェリが、頸飾のホックを外しながら溜息をついた。「嫁入道具の中に入れたら立派だろうなあ」

レアが片肱をついて体をおこした。

「誰の嫁入道具？」

「僕のさ」とシェリがおどけながら尤もらしい口調で言った。「僕の嫁入りの時の僕の宝石を入れる僕の道具入れさ……」

シェリは空中に飛び上った。そして完全なアントルシャ（飛び上っている間に踵を何度も打ち合わせるバレエのテクニック）をやってから再び床の上におり立つと、頭で入口の扉を押し開けて、叫びながら姿を消した。

「風呂だ、ロオズ、早くしてくれ、お袋のところで昼食なんだ」

（やれやれ）とレアは考えた、（浴室は湖水みたいになり、八本のタオルはその中を泳ぎまわり、洗面器の中は剃刀の削りかすだらけとなるわ、浴室を二つ持っていたいわ……）

しかし彼女は忽ちに、以前のように、衣裳戸棚をなくし、化粧室も削りとらねばならないだろうと考えた。そして、以前のように、こう結論した。

「シェリの結婚まで我慢しよう」

彼女は再び仰向けに横になった。そしてシェリが、前の晩に、靴下を煖炉の上に、小さなパンツを写字台の上に、ネクタイをレアの胸像の頸に投げかけていたのを見つけた。

彼女は思わずその男らしいはげしい乱暴さに微笑んで、若々しい青さを湛え、栗色の睫毛をめぐらした大きな落ち着いた両眼を再び半ばとざした。四十九歳になって、通称レア・ド・ロンヴァルと言われたレオニイ・ヴァロンは、十分なお手当を与えられた娼婦で、かつおべっかによる災難と上品な悲しみを免れた生涯をおくった善良な娘でもある幸福な生活を終えんとしていた。

彼女は自分の生れた年月をかくしていた。しかし、シェリの上に淫らながらも親しそうな視線をおとしながら、自分が二三のこまごました肉体的な楽しみを味える年齢に達していたことを喜んで告白していた。彼女は秩序を、美しい下着を、熟した葡萄酒を、よく考えられた御馳走などを好んでいた。ちやほやされた金髪娘の青春時代、ついで豊かな娼婦の成熟時代、それが彼女に困った華やかさも、曖昧な言い廻わしをも承知させなかった。そして彼女の友人たち

は、彼女を「親愛な芸術家」扱いしたジル・ブラス誌の副主筆にレアが、

「芸術家ですって、おお本当に、わたしの恋人たちはおしゃべりだこと……」

と答えた一八九五年頃の四輪馬車の競走会の一日を想いだしていた。

彼女と同じ年頃の人々は彼女のなにものにも動じない健康を嫉んでいた。一九一二年の流行ですでに背中と腹に詰物をいれていた若い女たちは、レアの恵まれた胸前を嘲笑っていた。——しかし若い女たちも、同じ年頃の女たちも等しく彼女がシェリを持っているのを羨んでいた。

「おやまあ大変ね」とレアが言った。「なんてことでしょう。勝手にあの人をとるといいわ、わたし、あの人にいつもひっついてはいませんよ。あの人はひとりで出歩いていますわ」

しかしそれは半分嘘だった。彼女はその関係を自慢にしていた。——彼女は、時々、本当のことを言いたくなる気持から、その関係を養子縁組などと呼んでいた——その関係はここ六年以来続いているのだった。

「嫁入り道具……」とレアは繰り返えした。

「シェリを結婚させることは……」

そんなことはあり得ない。——それは……人間的ではない……シェリに若い娘を与えること——なぜ犬どもに牝鹿を投げ与えないのだろうか、人々はシェリがどんな人間だかを知っていない。

彼女は、数珠のように、自分の指の間で、寝台の上になげられた自分の頸飾をいじりまわしていた。彼女は今は夜だけそれを外していた。というわけは、美しい真珠に惚れこんでいて、朝になるとそれを愛撫していたシェリが、何度も、ふとくなっている彼女の頸がその白さを失い、皮膚の下に、弛んだ筋肉が見えているのに気がついたろうからである。彼女は起き上らずに頸筋に頸飾のホックをかけ、枕頭の卓の上の鏡を手にとった。

「まるで女の植木屋のようだわ」と彼女は手加減のない判断を下した。「野菜をつくる女だわ、頸飾をつけて馬鈴薯畠に行くノルマンジイの百姓女そっくり、鼻に鵠鳥の羽でもさしておいた方がいいわ、——そうすれば、優美だわ」

彼女は、自分の体内にあるもう嫌になっていたすべてのものに厳しい気持を感じて、両肩をそびやかした。即ち生々として、健康で、少し赤味をおびた顔色、より地味な青色にとりかこまれた青い瞳の新鮮な色を際立たせるにふさわしい日焼けした顔色が嫌いになっていた。ただその誇り高い鼻はまだレアの気に入っていた。それはシェリの母親が、「マリイ・アントワネットの鼻」と断言していたものだった。尤も、その母親は、「……二年も経ったら、あのレアもルイ十六世のような顎を持つようになるだろう」と言い加えることを決して忘れなかった。細くきれいに歯の並んだその口は、殆んど決して大笑することはなく、ごく稀にそれもゆっくりとまばたきする大きな眼に調和して、時々微笑むだけだった。その微笑は、何度もほめられ、歌われ、写真にとられた微笑であり、決して人を飽きさせることのない意味深く自信にみちた微笑であった。

肉体については、レアは、「人間は、すぐれた質を持った肉体が長く持ちこたえることをよく知っている」と言っていた。彼女は、今でも尚、バラ色をおびたその大きな白い肉体を示すことができた。それは、長い足と、イタリイの噴水によく見られる水の精を思わせる平たい背中とに恵まれていた。小さな窪みのあるお尻と高く突き出ている乳房は、「十分シェリの結婚の後までも」そのまま少しも変るまいとレアは言っていた。

彼女はおき上ると、化粧着に身をくるみ、自分の手でカアテンを開けた。正午の日光が、バラ色の明るい、あまりにも飾り立てられた時代おくれの華やかさを持った室の中に入って来た。窓にかかった二重のレエス、壁の上のバラの葉模様の絹、金色の羽目板、バラ色と白色の笠を冠った電気の光、そして近代的な絹をはられた古風な家具類、レアはその柔かい感じの室も、その寝台——見た眼にいかめしく、脛に当って痛い銅と鍛鉄のすばらしい。こわれることのない傑作品——も、見捨てる気はなかった。

「いいえ、いいえ」とシェリの母親が抗議した。「この室はそれほど醜くはないわ、わたしはこの室が大好き、これは一つの時代を見せているわ、独特の粋な味があるわ、パイヴァ（十九世紀末パリ社交界で華やかな在存として名高かった娼婦型の女性）を想い出させるわ」

レアは、バラバラになったその髪毛をかき上げながら、いわゆる『フランス産のアルピイ』

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com